

中央区まちづくり有識者インタビュー

もっと つながる

中央区

まちづくり



つながり・生まれ・うごくまです「もっとステキな中央区」

中央区まちづくり10年間の

あゆみ —つながり・うまれ・うごきだす—

校区の位置

人口密度が最も高く都市機能集積が進んでいる市中央部のエリアで、県内一の中心商店街が広がるとともに城下町風情も残っており、新旧の調和が保たれています。行政機関や企業の本店も多く、交通網の拠点として熊本桜町バスターミナルからは放射線状にバス網が張り巡らされています。

また、区内を白川と坪井川が縦断し、中心部の熊本城一帯や北部の立田山の豊かな緑、南東部の水前寺成趣園や江津湖等の湧水など自然にも恵まれています。



人口・世帯数

面積：25.45 km²
校区数：19校区
人口：187,502人
世帯数：99,897世帯
(令和2年10月1日現在)

単身世帯比率		
令和3年4月	中央区	53.8%
	熊本市	43.2%

	面積(km ²)	平成22年国勢調査		平成27年国勢調査		令和2年国勢調査	
		人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
中央区	25.45	184,353	92,242	186,300	95,754	187,502	99,897
東区	50.19	188,082	74,942	190,451	78,406	189,524	80,454
西区	89.33	93,805	37,610	93,171	38,944	91,177	39,781
南区	110.01	122,600	43,499	127,769	47,144	130,829	49,967
北区	115.34	145,634	54,120	143,131	55,208	139,833	56,821
熊本市	390.32	734,474	302,413	740,822	315,456	738,865	326,920

検証の目的

平成25年3月の現行ビジョンの策定から10年が経過することから、まちづくりの方向性ごとにこれまでの取組み、実績等を整理し、まちづくりの専門家、ワークショップ等において総合的な評価及び検討課題等の抽出を行い、今後のまちづくりに反映していくことを目的とします。

この検証による成果をもとに、中央区の魅力・特性を最大限に生かし、地域が抱える様々な課題解決に取り組み、持続可能なまちづくりの実現に向け、行政と区民が協働による、だれもがいきいきと暮らせる中央区を目指してまいります。

まちづくりビジョンとは？

- 平成24年4月 政令指定都市移行
熊本市に5つの区(中央・東・西・南・北)を設置
- 平成25年3月 中央区まちづくりビジョンの策定
政令指定都市移行後の区の魅力・特性を生かした協働で進めるまちづくりの方向性を示すものとして、「中央区まちづくりビジョン」を策定。
めざす区の姿を「新たな出会いと未来創造の都会(まち)～つながる、中央区。～」とし、その実現に向けた目標年次を10年後の令和4年度(2022年度)に決めました。

まちづくりの方向性

01 「きらり」とひかる品格ただよまちをつくる

- 身近なまちの歴史や自然、文化を学び、育む機会の充実
- おもてなしの心、笑顔にあふれたまちづくり
- 熊本城をシンボルとした城下町の風情の保全と創造
- 「花いっぱい」など清潔で美しい生活環境づくり

02 「わくわく」があふれる活力と賑わいのあるまちをつくる

- 歩きたくなる中心市街地の魅力の向上と発信
- 若者や女性など多様な人材が活躍できる環境づくり
- 身近な商店街の利用の増加と魅力向上
- 文化・芸術あふれるまちの魅力向上

03 「ほっと」できる安全で安心なまちをつくる

- 挨拶や行事参加をととした区民のつながりづくり
- 登下校時の見守りなど通学路の安全確保
- 地域での防災訓練の実施やハザードマップ作成の推進
- 地域や学校、警察などの関係機関の連携強化

04 「いきいき」と暮らせる健やかなまちをつくる

- 高齢者を孤立させない仕組みづくり
- 障がいのある人が自らの能力を発揮できる場づくり
- 子育て支援や悩みを相談できる交流の場づくり
- 生活習慣病予防などの校区で取り組む健康づくり

まちづくりビジョンの検証手法

まちづくり推進事業等の振り返り

区民アンケート

まちづくり
ワークショップ

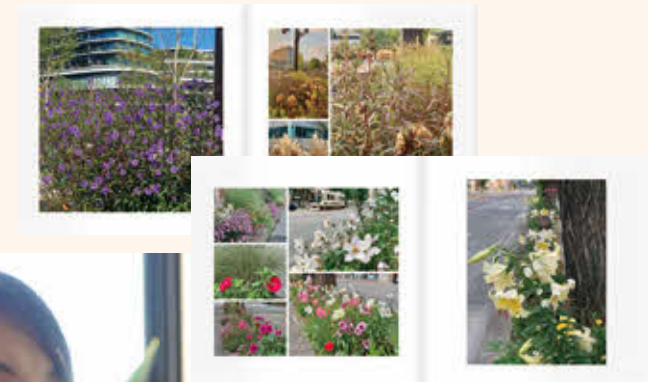
有識者
インタビュー

検証まとめ

ビジョン策定から10年が経過し、中央区のこれまでのまちづくりを振り返り、これからの課題や重点的に取り組むべきことを抽出することで、今後の中央区の新たなまちづくりに生かします。

これまでの区のまちづくり推進事業等の成果とともに、区民アンケート、ワークショップ、有識者インタビュー等により、現在のまちづくりに関する満足度や課題を検証します。

街の中心地で花を育て、慈しむ。 誰もが参加できるガーデニング



ランドスケープデザイナー
ゆるっとナ☆ガーデナーズ
永村 裕子さん
Yuko Nagamura

けがの功名!? コロナ禍の中で始めたチャレンジ

熊本市中心市街地で活動する「ゆるっとナ☆ガーデナーズ」は、ガーデナーの永村裕子さんを中心に、花好きの仲間が集まるガーデニングクラブです。SNSの登録者は約2000人。「小さなお子さんから70代まで幅広く参加されており、飛び入りも大歓迎です」と永村さん。

約3年前、市の事業で辛島町から花畑町に花を植栽しました。2020年の春からコロナ禍で海外での活動が中止となり、ぽっかりと時間が空いた永村さんは、その手入れを手弁当で始めます。その後、企業の協賛をもらいながら活動が続け、1年後に春の花が咲き誇ると、活動に賛同するスポンサー企業やボランティア仲間が増加。現在は、スポンサーの協賛とふるさと納税による支援で活動しています。さらに、花の図鑑を販売して、売上金を活用することも始めています。

街なかの花や緑への
考え方が変わる
「ストリートガーデニング」

こうした活動は、どこに住ん

でもても参加できて、公有地などに花を植えて世話をする「ストリートガーデニング」と呼ばれています。参加者は、花にふれる楽しみや、自分の庭のように自慢できる喜びを満喫しています。

永村さんたちの活動は、2022年の緑の都市賞「内閣総理大臣賞」に熊本市が選ばれた原動力にもなりました。「好きなときに参加したい人が参加する」ゆるい「スタイルなので、活動が破綻しにくい」と永村さん。花の盗難や花壇への踏み入れ防止には、手づくりの竹灯籠で作った柵を用いた工夫を試み中です。根底にあるのは、「参加者も、観賞者も楽しんでほしい」という願い。フリーで活動する自身の経験を踏まえて、「ストリートカルチャーのように、誰でも自由にカッコよくガーデニング出来るようになったら良いな。」と期待しています。行政、企業、個人が、それぞれの持ち味を生かしてアイデアを出し合い、多くの人々が花にふれる楽しさを体感できるまち。そんな未来が見えてきます。

02

地域の魅力、賑わい

きっかけは「白川が好きな仲間と、おもしろいことをやりたい」

17年前、A.L.T(外国語指導助手)として来熊したジェイソン・モーガンさん。その後は、翻訳業やクラフトビールを扱う店を運営してきました。熊本市中央区の白川の河川敷「緑の区間」で開催されたマーケットに出店した際、「あまり宣伝されていないのに自然と人が集まってくる。白川は水もきれいだし、雰囲気がとてもいい」と感じたそうです。「ここで何かできないだろうか」と考えていたところ、まちづくりのトークディスカッションで出会った人たちと意気投合。市役所の担当者の助言もあり、任意団体として活動を開始しました。

現在は、まちづくり株式会社

「Shikawa Banks」の代表を務め、メンバーと「白川夜市」やキャンピングイベント「白川野宿」の開催のほか、河川敷の清掃などを行っています。一流シェフを招いての食事会「白川テーブル」も予定しています。

河川敷を生かすことで
地域の可能性を探る

夜市の翌日に朝市を開催する案もあるそうですが、人手不足が課題。夜市だけでも50店近くに上り、設営には多くの人手が必要だからです。最近では出張開催の依頼が舞い込むことも。ただ、公共スペースを使用する際には、関係機関へ提出するいくつもの書類を、参加各店が用意しなければなりません。

「緑の区間には協議会があるため、相談から企画書作成、審議、決定までが比較的スムーズです。緑の区間で何かやりたい人がいるなら、Shikawa Banks が手伝えることもあります。近所の公園も、もっと簡単に使用できるシステムが欲しい」とモーガンさん。

「故郷のアメリカでは川遊びは当たり前。でも、ここで、川に

白川楽しく、熊本楽しく。 まちの魅力を リバーサイドから発信



株式会社 Shirakawa Banks

ジェイソン・モーガンさん
Jason Morgan



03

ICT

スマホやタブレット、パソコンで世界が広がる

くまもとデジタルサポートセンター（愛称・くまデジ）は熊本市中央区坪井で、スマートフォンやタブレット、パソコンなどの使い方の相談を受けています。リモート会議の支援や、デジタル機器の貸し出し、セミナーの開催もします。

「高齢者の中にはデジタルに苦手意識はあっても、『孫とLINE（ライン）をしたい』と思っている人も少なくありません。初めての一步を後押ししたいと考えています。一步踏み出せば世界が広がって楽しくなり、インスタグラムに投稿したり、パソコンでアルバムを作ってみたり、次々と挑戦する人もいます」と吉山さんは話します。中には80代、90代の人も来るそうです。

センターは、中央区役所と区内のICT企業による「官民連携」

「孫とLINEを」 高齢者のデジタル挑戦を後押し

株式会社 D-HORIZON
くまもとデジタルサポートセンター
吉山 寿一さん
Toshikazu Yoshiyama



で、2021年10月に開設しました。23年1月までに相談に来た人は292人、セミナー参加者は251人に上ります。

世代を超えて人と人がつながる循環を生み出した
60代以上を対象にインスタグラムのサークルを作ったところ、24人が参加しました。高齢者が用意した文章と写真を、大学生が投稿します。「若者と交流もでき、デジタルを通じて世代を超えて人と人がつながる良い循環ができています。そうした積み重ねで、住みやすいまちにつながると思います」

課題は、センターまで足を運

べない遠隔地にいる人の支援を挙げます。「公民館など身近なところで支援が受けられるようになればと思います」。熊本地震のときは、スマートフォンを使って情報を得た人も多くいました。吉山さんは「特に災害時に高齢者を取り残さないようにしたい」と力を込めます。

コロナの流行後、オンラインでの会議や在宅ワークも広がりました。吉山さんは「今は、地方にとってチャンス」だと言います。「これまで東京に行かなければならなかったことも、オンラインでできるようになりました。デジタル機器を使って、チャンスを生かしていけるよう最初の一步をサポートしたい。3年目は、くまデジのノウハウが広がって、拠点が増えたら良いと思っています」



04

城下町・歴史、保全

貴重な町屋のある
風景を守り、生かす活動

城下町の町割や古い町屋が残る古町。倉庫業を営み、マルシェやライブなどのイベントスペースとして知られる「早川倉庫」があります。主の早川祐三さんが古い建物に興味を持ったのは、崇城大学による建物調査で倉庫の歴史を知ったとき。倉庫とは別の活用方法として、「試験的な気持ちではじめた」のがイベントでした。

当初から、解体家屋から託された家財を蚤の市で販売して、収益を町屋保存に生かす活動を続け、現在は「一般社団法人 KIMORIDON」の一員として町屋のマッチングなどにも携わっています。団体は、一昨年に熊本市の実証実験に参加し、建物のファサード（正面部分）を

活用した無人店舗「マドカイ」や「ハイカラ百貨店」を開催。昨年は、一町一寺の路地等を生かしたまち歩きやワークショップを実施しました。「古い建物を生かす活動なので、まちおこし」という言葉はピンと来ない」と話す早川さん。しかし「結果的に魅力あるまちづくりにつながればいい」と感じています。

趣そのままに建物を保存し、
まちの財産として活用

建物の利活用の壁となっているのが「建築基準法」です。「用途変更」の際には、例えば防火素材などを現在の基準に合わせる必要があり、数年前、熊本市は建築基準法第3条に基づく「適用除外」に関する条例をつくりました。安全性確保などの代替案や必要な書類を揃えて認められれば、建築基準法の適用除外が可能です。その先例となるべく、早川さんは準備を進めています。

早川さんの夢は、「倉庫を宿泊施設や飲食店、結婚式場、ビール醸造所などの複合施設にすること」。「例えば、いろいろな人や会社がクラフトビールを仕込

歴史ある建物の再生が 人を集め、 まちの息づかいになる



早川倉庫
早川 祐三さん
Yuzo Hayakawa



めたら、人同士の化学反応が起きて面白いと思う。自分は人が好きではないと思っていたが、実は好きなのかもしれない」と、笑いながら語りました。

建物の趣を残しつつ新風を吹き込むためには、法律の壁は避けられない問題。まちの財産として利活用しやすくなる法の仕組みが重要です。

地域ニーズの掘り起こしが 重要なエリアマネジメント



熊本市中央繁栄会連合会会長（2023年4月25日から）
熊本城東マネジメント株式会社 代表取締役
城見町全栄会 会長

南 良輔さん
Ryosuke Minami

まちづくりのきっかけは
“エコ”を軸にした取組み

城見町全栄会の会長・南良輔さんがまちづくりに関わり始めた頃、皆で議論する中で「“環境”を切り口にした商店街活性化」に着目します。視察先の「熊本市リサイクル情報プラザ」（熊本市東区・2017年閉館で、当時珍しかったラッキーチケット付き空き缶回収機を見つけ、城見町にも同じ回収機を設置して「環境フェア」を開催。その縁で、全国区の商店街サミットにも参加しました。

2008年には、まちづくり会社「熊本城東マネジメント株式会社」を設立しました。例えば、各々の店のゴミ処理を一括化して経費削減を図り、浮いたお金を地域に還元。エリアマネジメントによって、住みたいまち、出店したいまちへと変えていくのです。南さんは「きちんと決算報告した後に議論を重ね、ニーズを掘り起こしていくことが、まちの魅力アップにつながる」と語ります。

変わりゆくまち。
住民の声を聞き、
エリアの価値を高める

2015年から約5年、国土

交通省河川事務所と市民や小学校を結んで、白川緑の区間の沿岸をマルシェなどに活用する「ミズベリング白川74」も牽引しました。補助金に頼らず、事業スキームを自分たちで設計して、利益が出たら還元する「公民連携」の好事例です。

人口増加が続く中央区には新しいマンションが建ち並び、城下町の面影は消えつつあります。その一方で、中心部は老朽化した建物が多く、今後は不動産整理が課題になりそうです。土地をどのように有効活用すれば、住みたい、観光したい、出店したいまちになるのか。「不動産の活性化には新規開店サポートやマーケティングによるリーシング賃貸支援が必要」と南さん。例えば、コロナ禍で空き店舗の増加に拍車がかかり、熊本市は対策として新規出店者や空き店舗所有者への支援事業を行ってきました。活性化支援を活用しながら、いかに店や周辺の賑わいを継続させるか。支援を受ける側は、地域の人たちが何を欲しているか常に関わりを持ち、事業を進める必要があります。南さんはニーズに向き合ったまちづくりで、エリア全体の価値を高めていく重要性を実感しています。

06

国際、多様性

日本人同士の人間関係を
変えるきっかけにも

熊本市国際交流会館を運営する国際交流振興事業団。勝谷さんは事務局長を務めています。取り組む事業は大きく分けて「多文化共生のまちづくり」「人材育成」「国際化推進事業」の3つです。

中央区には、熊本市の中で一番多くの外国人が暮らしています。理由は様々です。留学、仕事、技能実習、国際結婚などです。中には、親の再婚や仕事の都合で呼び寄せられた日本語が全くできないこともたちいます。そんな外国人を対象に火曜、水曜、日曜に日本語教室を開いています。毎回約20人が集まり、学習者とペアになり、日本語学習活動を行っています。「外国人にとって日本語はとても難しく、

外国人も交えた 多文化共生の地域づくり



熊本市国際交流
振興事業団
勝谷 知美さん
Katsuya Tomomi

特に話し言葉では、主語がなかったり、方言が混じっていたりします。できるだけ方言は使わず、やさしい日本語（簡単で分かりやすい日本語）に言い換え、文章の最後は「です」「ます」で終わる短い文にすると、伝わりやすくなります」と勝谷さんは話します。

さらに、外国人にとって、自国にない制度や文化などは、言い換えても理解しづらいものとなっています。例えば、地域にある町内自治会活動などです。自治会の活動そのものがわからなくても、地域のイベントや情報などの文書の漢字に、ルビを振るだけでもハードルがぐっと下がります。まずは、すべてを理解してもらうということよりも、少しでもわかるように伝える、どうしたら伝わるかを考えることが大事です。同じ地域に住む住民として、対等に付き合える関係性を築こうと努力することだと思っています。

違うアイデアや視点が
あれば可能性が広がる

2019年に外国人のための総合相談プラザを開設しました。寄せられる相談は、年間1000件



今後の目標は、「多文化を生かした地域づくり」です。「外国人とも心を開いて、一緒に地域づくりをすれば、可能性が広がって発展につながると思います。アイデアも視点も違う人たちと交流すると、新たな発見や気づきもあります」と強調します。

ほど。「当初は結婚、離婚、DVなどに関する相談が多かったのですが、最近では、在留資格に関する相談や外国にルーツを持つことものの教育に関する相談など増えています。相談には在留資格や法律、教育などの専門相談員、多言語の相談員と協力し、解決まで寄り添って対応しています」と勝谷さん。対応できる言語は三者通話によるものも含め21に上ります。

熊本地震のときは、イスラム教徒の方たちが支援物資を配っていました。支援を受けるだけでなく、支援する側に回る外国人もいます。

空き缶や袋：身近なものを使って災害に備えたい

NPO法人ソナエトコは、防災、防犯、教育を3本柱に、2013年に発足。親子で楽しく学んでもらおうと、講演や、ワークショップを開いたりしています。熊本シティエフエムのパーソナリティーも務める高智穂さんは、防災関連の番組を担当したことをきっかけに、防災士の資格を取りました。

高智穂さんが開くワークショップでは、空き缶を使ってご飯を炊いたり、ペットボトルを使ってピザを作ったりします。身近なものを使って災害に備えることを目標にしています。



ラジオパーソナリティ
NPO法人ソナエトコ
高智穂 さくらさん
Sakura Takachiho

親子で楽しく学ぶ 「防災」「防犯」「教育」

07

防災、防犯

防災を自分のこととして再認識してほしい

NPO法人の名前には「備えておこう」と「備えと、こども」という2つの意味が込められています。課題は「保護者世代へのアプローチ」と言います。保護者らでつくるPTAは近年、任意加入が徹底されるようになり、活動を縮小するところもあります。そこで、「こどもにアプローチすることで、親世代ともつながっていかれたら」と思っています。暮らしやすいまちにするために欠かせないのは、地域住民同士のつながり。お互い顔の見える関係があれば、安全で安心できるまちにできると思います」と高智穂さんは話します。

自分が住んでいる地域をよりよくしていくためには、「まずは自分が関わっていくこと」と高智穂さん。例えば、地域で開かれるイベントへの参加、地域の掲示板のポスターが外れていた貼りなおす、近所の人にあいさつをする…。「誰にでもできることがあります。防災や防犯を、自分のこととして再認識してもらえたら」と願っています。

気づいていない水前寺の魅力を地元の人に伝えたい

“参加者よし、実行委員よし、水前寺によし”の「三方よし」をコンセプトに、地元の学校や商店などが参加する「水まち水前寺にぎわい祭り」。吉本祐之さんは若い店主らの団体「新水前寺にぎわい隊」で、顧問を務めています。

祭りの目的は、「見過ごされている水前寺のお宝を、地元の人に知ってもらう」こと。2014年の第1回では、「参加依頼のために飛び込みで学校を訪れたり、台風による延期を余儀なくされたりと困難の連続でした」と吉本さん。5回目の際には、企画に参加した大学生から「10月に開催するのに、なぜハロウィンと組み合わせないの？」と指摘されて、そのアイデアを取り入れたそうです。

3年ぶりの開催となった昨年は、広告協賛の外にクラウドファンディングで資金を集め、延べ2,000人が参加。来場者数は15,000人に上りました。

まちづくりの最終目標は
“永住できる水前寺”

「他地区出身の私から見れば、

08

地域の魅力、賑わい

単なるイベントで終わらせない、 地域の未来を照らす祭り

水まち水前寺実行委員会
会長
吉本 祐之さん
Yuji Yoshimoto



水前寺ほどポテンシャルの高いまちはない。祭りで地元の良さに気づき、将来的に永住を考えたいという人たちが集まる。吉本さんは語ります。

実行委員会には、他地区でまちづくりに携わる人たちも協力。「素晴らしい取組みをしている地域はたくさんある。ただ、点だけでは発展がない。みんなもつと発信して、自慢していい」。地域という点と点が線となり、面となることで、熊本市全体が盛り上がることを期待しています。祭りをイベントに終わらせず、波及効果をアップしようと、2会場での開催やワークショップの実施などを計画。「多くの方に協力していただき、活動に注目していただくことも増えた。もう一段階ギアを上げるため、まちづくりの会社をつくりたい」。吉本さんはそんな力強い夢を抱いています。

09

防災

チャレンジのハードルを低く、 人と人がつながりやすく



東海大学准教授

安部 美和さん
Miwa Abe

楽しいイベントで
防災を「日常」のものに

東海大学准教授の安部美和さんは熊本地震のとき、当時勤めていた熊本大学で学生たちと避難所運営に当たりました。「避難してきただけの約1000人のうち約200人が外国人でした。近くに住んでいても住民からはあまり関わりがない存在になっていたのではないのでしょうか。日ごろからコミュニケーションをとって、顔の見える関係を築く必要性を感じました」と振り返ります。

防災を「非日常」にしておくのではなく、「日常」にしておくことが鍵と指摘します。「例えばイベントの中で、水の消火器を使ったり、ジャッキを使って人形を引っ張り出したリするスタンプラリーをすれば、こどもたちも楽しみながらサバイバル能力を上げられます。避難所となる場所を、事前にイベント会場として使うのもいいと思います。楽しい仕掛けは大切。防災訓練には来なかった人たちが来てくれるのではないのでしょうか」

地域の人の情報を
共有できる場所があれば

中央区には大学や企業などが集

まっています。「幅広い世代がいますので、アイデア次第でつながれるチャンスはたくさんあります。大学生と保育園児などがつながったら面白いことができると思います」

「近くにサポートが必要な人がいます」「いま困っています」「私はこれができます」「一緒にやりませんか」：などの情報を共有できる場所を設けることを提案します。「気軽に足を運べて、気軽に話せるスペースがあれば、いろんな人のつながりができると思います。また、まちづくりなどの活動の垣根を低く、つながりやすきたいですね。チャレンジしてみよう、失敗してもいいよ、という土壌も大切です」

中央区の大きな課題の1つは交通渋滞で、まちづくりアンケートの結果をみても市民の道路に対する不満も高いです。「道路の問題はすぐには解決できませんが、自転車で行動しやすくするといった方法もあります。特に中央区は高校、大学で自転車利用者が多いため、行動を変えることを促す動機付けを、政策とセットでできればいいのではないのでしょうか。自分事」として考えるような政策づくりが課題です」と話します。

10

高齢者福祉

地域との連携を大切にしています。

高齢者が安心して住み慣れた地域で生活ができるように支援をする「ささえりあ」は、地域の65歳以上の方たちの相談窓口です。芹川さんは「ささえりあ帯山」のセンター長を務めています。

地域で活動されている民生委員の方々の活動のアンケート調査を実施し、地域のつながりの場であるサロン活動の状況と地域の中で支え合う人づくりについて研修会を開きました。「地域の自治会や社協、民児協等の地域住民の方々と地域の医療福祉等の専門職や行政も一緒に、高齢者の抱える課題や地域活動の課題を共有し、解決策を検討しました」

このような研修会の中で、一緒に話し合う過程が「支え合う

高齢になっても住みやすいまちへ「場づくりと人づくり」



こと、つながることの大切さ」を実感できる場でもあると感じたそうです。「お互いの立場や役割を理解し、連携することによりよい関係が構築できると思います」

途切れず、つながり続ける仕組みづくりを

75歳以上のニーズを把握しようとアンケートを取ったところ、「歩いて行ける場所で、筋力低下を予防するサービス」を望む回答が多かったといえます。「これからの時代の変化を考えると、



ささえりあ帯山
芹川 真寿美さん
Masumi Serikawa

地域での介護予防に取り組むことや、お互いで支え合うシステムを構築していくことが大切だと感じています」

そのためには、地域の活動を知り、その課題を共有し、高校や大学等の教育機関、企業、医療や福祉、行政も含めて皆で取り組んで行くことができればと考えているそうです。「元氣なうちから、地域社会の一員として持っている能力を活用した参加をすることで、つながり続けられるようなシステムができれば、高齢になっても住みやすい地域になるのでは」と話します。

地域での活動を通して、日頃から顔の見える関係ができることで、地域の方同士がつながり、防災にも強いまちづくりになると思います。



障がい者福祉

人気のサポーター研修は年間約5000人が受講

在宅の障がい者やその家族などの相談窓口となる熊本市障がい者相談支援センターは、「地域づくり」も大きなテーマにしています。園田さんはその理由を「障がい者が安心して暮らせるためには、地域の方々との関係づくりが欠かせません。地域の民生委員や自治会としっかり対話したいと考えています」と説明します。

障がいの特性を知ってもらおうと、小中高校や大学、企業に出かけ、障がい者サポーター研修もしています。「アイマスクをして階段を昇り降りしたり、車いすに乗ったりして体験してもらおうようにしています」と大関さん。参加者は増加傾向にあり、

地域の中で障がい者も安心して暮らせるまちへ



熊本市障がい者相談支援センターウィズセンター長
大関 宏治さん
Kouji Oozeki

熊本市障がい者相談支援センターちゅうおうセンター長
園田 亮吉さん
Ryokichi Sonoda

2017年度は2421人でしたが、21年度は5100人とは倍増しました。「大人になっても、体験したことを覚えていてもらえるとうれしいですね」と園田さんは笑顔で話します。

障がいの有無関係なく「お互いさまのまちづくり」

高齢者と違って、障がい者の情報を把握することは難しいといえます。「障がいを受容してい

ない人もいます。困っている人をどう掘り起こしていけるのが課題です。「助けて」と言えない人もいますので、日ごろから地域でのコミュニケーションを大切にしたいです」と2人は口をそろえます。

熊本市中央区が実施したアンケートで、各分野の満足度を尋ねたところ、「障がいのある人が安心して暮らせる」ことに対して、「不満」と答えた人が25.5%と、「満足」の10.1%を大きく上回りました。

園田さんは「支援を受けられていない障がい者もいるのではないのでしょうか。地域のイベントや防災訓練の情報があっても、障がい者に届いていないかもしれないですね。参加すると迷惑をかけるのでは、と心配する人もいます。回覧板で情報を回すだけでなく、声をかけてもらえると参加しやすくなります。防災を考えるときに、障がい者のことを見落とさないでほしいです」と呼びかけます。

大関さんは「障がいがあってもなくても関係ない、と言えるまちにしたいですね。」お互いさまのまちづくりだと思っています」と強調しました。

地域がつながる 子育てのしやすいまちづくり



子育て支援ネットワーク
井澤 美紀さん
Miki Izawa

孤立しがちな育児中の親子が気軽に参加できるサークル

井澤美紀さんは、大江校区で主任児童委員を引き受けて6年目になります。「主任児童委員」とは、民生委員・児童委員と、児童相談所、市町村、学校など関係機関の間に立って、橋渡しをする役目を担っています。

主な活動は、月に1回開催する子育てサークルです。対象は乳幼児とその保護者。井澤さんは、「親子の遊び場というより、お母さんたちのケアの場。友達をつくったり互いの経験を共有したりして、笑顔になってくれたらうれしい」と話します。

母親が子育てのちよつとした不安や戸惑いを解消して楽しく過ごせれば、こどもも元気になるからです。サークルにはどの校区からでも参加でき、予約も必要ありません。

コロナ禍で気づいた地域ネットワークの大切さ

コロナ禍で、子育てサークルも多くが中止を余儀なくされました。「大江校区では、幸いにも地域の理解を得て、可能な限り

開催することができました。やって来る親子が1組であっても、ここが開いていることが大事」と井澤さんは言います。「良好な地域のつながりがあることで、参加者へのサポートにも迅速に動ける」からです。3年前には、社会福祉協議会や民生委員・児童委員が協力して、同じ校区にもう1つサークルを増やすことができました。

今後は、コロナ禍で希薄になったつながりの再構築や、新設されるコミュニティセンターでの異世代交流を考えています。2023年度は、「正月あそび」をテーマにした高齢者との交流を計画中です。ただ、「アイデアはあるのに、マンパワー不足で動けないこともある」と井澤さん。学生ボランティアや医療機関との連携といった、新たなネットワークづくりの必要性も感じています。

サークルの輪が広がることで、子育てに不安を感じている人へのサポートがしやすくなります。こどもも大人も安心して暮らせるまちには、こうした地元住民や関係機関とのつながりは欠かせません。

AIの自動運転技術を 使って高齢者も移動しやすく

若者は中央区に何を期待するのか、熊本大学のボランティアサークルで活動する3人に聞きました。

田中さんは「誰も置いてきばりにならず、老若男女がゆるやかに集まれる場所があればすてきだなと思います」と話します。「例えば気軽に立ち寄れて音楽を聴いたり、絵画を見たり、五感で楽しめる空間が点々とあれば、そこを巡るだけでも楽しいと思います」

中央公民館の動画にナビゲーターとして出演したことのある井上さんは、「公共施設は若者にとって行きにくいイメージがありますが、多様な世代の交流ができればいいと思います」と



熊本大文学部2年
田中 健太さん
Kenta Tanaka

熊本大法学部3年
井上 陽菜さん
Haruna Inoue

熊本大法学部2年
山本 祐貴さん
Yuki Yamamoto

老若男女が緩やかに集まって 「五感で楽しめる空間」を

語ります。「AI（人工知能）の自動運転技術を使って小規模のバスを走らせれば、高齢者も移動しやすくなるのではないのでしょうか」と提案します。

くまもとデジタルサポートセンターで高齢者にスマートフォンなどの使い方を教える山本さんは、「先日、阿蘇にある駄菓子屋に行ってきました。新しいこ

とも大事ですが、昔から続いているもの、長く親しまれているものもすつと心に入ってきます。写真映えもいいと思いました。写真映えが良ければSNSで発信しやすくなります。SNSを意識した取組みがうけるといいです」と語ります。

アイデアが豊富な大学生の 声を生かして連携を

災害支援や農業支援など幅広く活動する3人は、「大学ではできない体験ができ、いろんな人とながれるのが魅力」と口をそろえます。井上さんは「大学生はアイデアが豊富で、大人とは違った目線があります。それを拾い上げて行政や民間の方と連携して活動できれば、まちも活性化するのではないかと思います」と、力強く語ってくれました。

地域活動を活性化させる具体的な方策として、「負担というイメージを変えることが必要。AIを使って改善策を考えてはどうでしょう」「活動に参加したら商品券がもらえるといったメリットがあってもいいのでは。そこに行政の支援があればいいと思います」などの意見がありました。

発行者：熊本市中央区役所総務企画課

T E L：096-328-2610

F A X：096-355-4190

E-mail: chuousoumukikaku@city.kumamoto.lg.jp

〒860-8618 熊本市中央区手取本町1番1号